

倉方健作／評



エリック・アザン 著 杉村昌昭 訳

パリ大全

パリを創った人々・パリが創った人々

以文社 4725 円

パリ歴史散歩へ

原著は2002年の刊行以来フランスで広く読者を獲得している。一步進んだパリの案内書としてスタンダードの地位を確立した好著の待望の邦訳である。

「パリの物理的変化は場所の精と時間の精のあいだの絶えざる闘争として読み取ることができる」と語る著者は、まず第一部「パリの巡視路」で、長期滞在者も、おそらく住人も気づくことの少ない境界線、隠れた歴史軸を次々と読者に示す。半可通、お堅い研究、細切れのエッセー、極私的回想といった「パリ本」にありがちな陥穽^{かんせい}を見事に避けた、理想的な同伴者との知的な喜びに満ちた散歩がこうして始まる。博識と鋭い感性を持ち合わせた著者アザンは1936年パリ生まれ、3代目の出版人として文壇と出版界の逸話には事欠かない。一方で熱心な政

治活動家でもあり、新たに興した気鋭の出版社「ラ・ファブリック」を率いるアザンの真摯な姿勢を知れば、第二部「赤いパリ」で民衆に向けられる眼差しもより理解できよう。18世紀末以来の革命と街路の結び付きを叙述した本書の圧巻である。

第三部「雑踏のパリに行く」では散歩の先達たちが敬愛を込めて語られる。ルソー、レチフ、ネルヴァル、ボードレー、ブルトンと、散歩者の系譜は常に夢想と隣り合ってきた。本書でときおり湧き出すアザン自身の夢想——サン＝シュルピス近辺の新興のブティックを怒れる民衆が打ち壊す、街路に冠された第二帝政期の恥ずべき名を小説の主人公たちの名前に置き換えるといった——に共感する読者も多いだろう。

読みやすくりズムのいい翻訳は散歩の足取りを乱さない。固有名詞の多い大部の書物の常として、表記のブレや転記のミスは多少目につく。カタカナ表記と原綴を対応させた索引もあれば、パリの街路名に馴染みの薄い読者の助けになったことだろう。例えば本書の表記での「デゼコール通り」「アベドレペ通り」は、パリの地図の街路索引ではそれぞれ「E」「L」の項を探す必要があるのだから（少なくとも私の手持ちの地図ではそうだ）。

パリを一度訪れた者には一生パリがついてまわるという。真の住処を心ならずも離れている流謫の身を慰めるには絶好の書であり、やがて迎える帰郷の日の喜びを倍增させることは間違いない。

(くらかた・けんさく)